ISSN 0388－5569
VOL. 13 No. 3
（通巻39号）
1992. 10

# Library News

山口大学附属図書館報

目次

空間と時間を克服する図書館　道廣　泰倫… 1
フライブルク大学化学図書館の回想　福永　公寿… 2
雑感　図書の利用をめぐって　富平　美波… 4
平成4年度大学図書館職員長期研修に参加して　吉光　紀行… 6
寄贈図書…… 7
日　誌…… 8

## 空間と時間を克服する図書館

道　廣　泰　倫

私は幼少の頃より病弱で家の中にこもりがちであったため、自然に本を友とすることになり読書に親しんでいった。その第一歩は講談社の絵本であった。母から講談社の絵本をいろいろ買いそろえてもらい、それらを何度も繰り返し眺めたり読んだりして日を過ごした。私の父母が画家であったせいかもしれないが、私は本を読むことだけでなく本の絵の方もこよなく愛した。私は伊藤彦造や樺島勝一の絵がすこぶる好きで、それらを真似て寝食を忘れて描きまくったものである。現在の私の絵画好きは、この頃から培われたようである。私の読書好きを知った大人たちは、私の家を訪れる時、よく、いろいろな本を持ってきてくれて私を喜ばせた。グリム童話、アンデルセン童話、ニルスの冒険の本なども、それらの中にあった。

私が図書館というものにはじめて関るようになったのは、中学校に入った時である。私は金光教の関係する中高一貫教育を目指す私立学校で学んだ。学校の付近には、やはり金光教が関係する金光図書館というかなり大きな立派な図書館があったのである。当時の図書館長は前代の金光教教主であった。現在の教主はそのお子様で、私の一年先輩である。私は最終の授業が終ると一目散に図書館に駆け込み、読みたい漫画数冊を確保して、時折、大きな笑いを発しながら読んだものである。このようにして私は、毎日毎日、漫画読みに明け暮れして、自転車で50分かかる家路を急いだ。だれでも少年時代にこのような時期を通り抜けないといけないのであろう。やがて私は図書館にある他の本に目を向けた。「少年」という雑誌である。その中に連載されている江戸川乱歩の怪人二十面相の小説が、何ともいえず少年の心をわくわくさせたのである。次の号が待ちきれなかった。そのうち江戸川乱歩の大人向きの本も読むようになった。それらの本は私をあやしげなエロチックな耽美の世界へと引きずり込み私を陶酔させた。名探偵の明智小五郎も大好きであった。私の推理小説への病み付きは、ここから始まった。当時は推理小説といわないで探偵小説といわれていたが、江戸川乱歩以外の探偵作家、横溝正史、高木彬光、大下宇陀児、木々高太郎等々の探偵小説も読みふけり、それぞれの犯人探しの推理の醍醐味に私は堪能した。中でも私の掘り出し物は、小酒井不木の探偵小説である。小酒井不木は医師でもあり、江戸川乱歩に大きな影響を与えた探偵小説の原点に立つ人である。小酒井不木の探偵小説の中の推理には、医師らしく科学的に「なるほど」と思わせるものがあって感心させられた。医師といえば、木々高太郎（本名は林髞）は慶応義塾大学医学部長も務めた人

で、医学を内容とした探偵小説を多く世に出した。直木賞も受賞している。他方、外国の探偵小説であるエドガー・アラン・ポーの「モルグ街の殺人」やコナン・ドイルの一連のシャーロック・ホームズ集も人並みに読んで楽しんだ。

金光図書館には、漫画、雑誌、大衆小説のほかにも、古くからの文学小説や学術図書も多く備えられていた。少年の私にとっては、この程度の図書館でも、十分に空間と時間を克服する図書館であった。すなわち、古今東西の本を一堂に集めている図書館が、空間と時間とを克服する図書館であるというわけである。私は、現在では、図書館でもっぱら学術図書を利用しているのであるが、専門の本ともなると、十分に空間と時間を克服した図書館には、なかなかお目にかかれない。特に私の研究しているスウェーデン法に関するスウェーデン語で書かれた本に関しては、そうである。私はついに意を決して文部省の在外研究の機会を利用してスウェーデンまで行き、必要な資料を収集して帰った。

スウェーデンでは、同じ本でも書店により価格が様々であるのには驚いた。あちこちの書店を一通りまわってみて最も安い価格の本を入手しなければならないので、ずいぶんと骨が折れた。ストックホルム大学の書店では入口に大きく「本はすべて20%引き」と掲示していて他のどの書店よりも本は確かに安かったが、定価らしきものは最後まで分からなかった。書店に出まわっていない古い本は、図書館で借りて必要な部分をコピーした。ストックホルム大学の付属図書館は午後８時頃まで開かれており、一般市民によってもよく利用されていた。私のようなえたいの知れない外国人でも、何の紹介状もなしに学生と同じように自由に書庫室の中に入り込み本を借り出すことができた。さすが世界一の福祉国家らしいと感心させられたものである。

ストックホルム市から北方へ約66キロメートル離れたところにウプサラ市があるが、そこには1477年に創立された北欧最古の大学であるウプサラ大学が存在し、その付属図書館は、さすが歴史の古さを物語るように200万冊以上の蔵書を誇っていた。そこに展示されている６世紀のゴシック翻訳福音書は、羊皮紙に金と銀の文字が書かれていて、見る者の目を見張らさせた。それと同じような体験は、フランスのルーブル美術館で西暦紀元前17・８世紀の頃の石に刻まれたハンムラビ法典を目にした時にも味わった。

学術文化の発展は同時代の人たちの協力によって為し遂げられると同時に過去のものの上に積み重ねられて為し遂げられるものでもあるから、われわれの研究は常に空間と時間に関ることになる。現在、図書館では、空間と時間を克服するために、ファックスや郵便のほかに、日経テレコムやＴＫＣなどのコンピューターによる文献の検索システムが利用されているが、さらに、いつの日か、全国の図書館をネットワークにした、いな、海外まで出かけないですむような世界の図書館をネットワークにしたコンピューターによる文献検索システムが実現されることを夢見たい。　（教養部教授）

# フライブルク大学化学図書館の回想

福　永　公　寿

海外の大学図書館の様子を問われたのがこの回想です。

私の留学していた研究室は南西ドイツのフライブルク大学の Institute für Organische Chemie und Biochemie に属しており、10講座で10階建ての独立した建物のむかって左半分の１、２階にまたがって化学図書分館（Fachbereichsbibliothek Chemie）があります。日本でいえば、学科毎に一つの独立した建物があり、一つの図書分館を付属しているということに相当します。

そこには、本館報 Vol.11、No.1 (1990) に小国教授が書かれていたように「化学」関連の学術雑誌はとくに数が多いのですが、地元（ヨーロッパ）の利点からか歴史の古いせいか（1456年創立）、化学と名の付くほとんどの雑誌が初刊

から完全に揃っていることがまず驚きと羨望でした。医学部、薬学部やかつてStaudinger（1953年ノーベル賞受賞）が教鞭をとっていた高分子のInstituteが隣接していて化学関連雑誌をそこに集中させているためでもあります。

日本の雑誌ではどんなものが入っているか興味をもってみると、やはり、Chemistry Letters や Bulletin of Chemical Society of Japan 誌など欧文で書かれている雑誌しかありませんでした。しかし、そこに存在しないからといって日本語で書かれている雑誌も顧みられないこともなく（おそらく、ケミカルアブストラクト（CA）での検索によるものと思う）、タンパク質のX線構造解析を行っている生化学講座の学生が結晶になるタンパク質が必要ということでシュツットガルトで入手したという日本語の日本農芸化学会誌のコピーをもってきて、酵素の調製法を英語に訳してほしいと依頼されたこともあります。CAについては10年間まとめてのアブストラクトもありましたので、古い時代から調査していく必要のある場合には非常に重宝でした。

そして、もちろん著名な単行本も沢山揃えてあり、年間2回ほどリストが出され、学生の希望と教官の判断で購入する本を選定していたようです。

さて、当時の利用者カード（Benutzerkarte）から図書分館利用規定をみると、①各利用者は定められた規則と所轄の図書館職員の指示にしたがわねばならない。これらの義務の不履行から生じた損害に対しては責任を負わなければならない。②利用者カードは図書館入館に際して監督者に自発的に呈示すること。③上着、傘、カバンなどの大きな物や飲食物は館内に持ち込むことはできない。携帯品置場が入り口横にある。④館内では静粛をたもち、とくに大声で話してはならない。⑤常に清潔を心掛けること。ゴミは備え付けの屑もの入れに入れること。⑥館蔵物は大切に扱うこと。とくに、本やカタログに書込をしたり、下線を引いたりしないこと。カタログのメモ用紙は取り出してはいけない。⑦利用後は本をまた分類記号札で指定された場所に返却すること。利用者が60分以上館内を離れる場合はそうすること。その場合、さらに机上からすべての個人の持ち物を持ち去らなければならない。⑧図書館を出るときは携行する本、書類などを監督者に自発的に呈示すること。⑨この化学図書分館は館内閲覧制図書館である。したがって、原則的に館外で利用するために図書を持ち出すことはできない。しかし、同階に設置してある器械でコピーを作成するための短時間の持ち出しは自由である。、となっていました。

たしかに本をコピーのため以外は館外へ持ち出せないようになっていました。このことは山口大学とくらべて一見不便のように思えますが、図書館に行けば必ず本があるという安心感を与えていたし、かなり熟練された学生と研究者の利用がほとんどであって、本の一部を抜粋してメモ書きするぐらいで事足りることが多かったので、コピーさえとれれば貸し出しのないことにそう不便は感じることはありませんでした。

開館時間は月～木は8：00～19：00で、金は8：00～13：00でしたが、とくに有難い配慮があったのは研究室に一個、図書分館の合鍵があり、休日とか夜間に必要ならそれを使って図書分館に入ってもよいことでした（Institute の入口の鍵は研究学生あるいは職員として大学に登録されれば、各自に配布される）。もちろん、講座に鍵は一つですので現在誰が使用中であるかは備え付けのノートに記録しておきます。

この鍵には次のような感慨深い思い出があります。帰国も数か月に近づいた年末近くになっても研究に必要な化合物の合成がうまくいかず、今までの方法を変える必要が生じました。そこで、クリスマス休みの連日・連夜、この鍵を使い図書館に通って文献を読みあさり、計画を練りなおしました。その新しい合成経路のスタートが幸運にも混合物を一週間室温で放置する反応（アジ化ギ酸エチルのノルボルネンへの付加反応）でした。これなら丁度、年始明けには反応が終了していると考え、急いで反応混合物を作りました。そして、室温といっても休みで暖房の切れた普通の実験室ではマイナスの温度になりますので、無休で常に十数台のキャピラリーガスクロマトグラフが稼働していて暖かいガスクロ室にその混合液を置きました。こうして、心おきなく、家族の熱望するロマンチック街道

への年末年始の旅行に出発することが出来、また、その後の新しいプランが想定どおりに実現出来たことです。

私はスペースシャトルの毛利衛さんよろしくこの鍵を使って休日とか夜間にもよく図書室に入りましたが、意外に先客がいたり、誰かが後で入ってくることが多く、かなりの時間外利用者がありました。管理者のいない時間にも非公式ながら図書館を開放しているのは利用者と管理者の相互の信頼の産物以外のなにものでもなく、その辺りにドイツ人の度量の大きさを感じました。　（工学部助教授）

## 雑　感　　図書の利用をめぐって

富　平　美　波

まだまだゆうちょうな日々を送っている文系教師として、たわいのないお話を申し述べたい。

図書館は、広く書物を保管して閲覧に供し、あわせて書物に関する情報を提供してくださるところである。したがって、書物から学術情報を得るのみか、書物の形で発表されたもの自体を研究対象にすることの多い我々としては、まことにその恩恵に浴しているのであるが、実のところ、おおかたの者が、図書館自体をそうたいして愛しているわけではない。現実にはありえぬことだが、もし、研究に必要な文献が全部自分のお金で買えたなら、或いはとにかく個人の所有にできたなら、図書館の存在さえ忘却していられるというのが本音である。人によって程度の差はあれ、ともかく「本好き」で、落籍して手活けの花にしないと気が済まないという理由も大きいが、ほかの理由もある。勉強が愉しくならないからである。私も以前は蔵書のページをよごすのを嫌う一人であったが、いつの頃か、「お勉強」にすでに「この先」というものがちぢまってきたように思え、リファレンスの効率のほうが重要に思えてきてから、一転、蛍光マーカー等を買い込み、縦横に線を引くなどするようになった。さすがに、ページを切り抜いてスクラップしたりはしないが、そのマニアのかたもどこかにおられるはずで、つまりあらためて申すまでもないことだが、所謂「読書」ではなく、文献を系統立った知識の獲得の為に利用しようとするなら、必要とあれば消耗品扱いできることが保証されていなければならない。しかし書物は、どんなによく似た内容のものでも絶対に代替性のないものであるから、いったん古書になったとなると、消耗品とはおよそ縁が遠くなってしまい、自ずと作業用の複製を作らざるを得ない。我々が、やたらと手もとにある本のコピーを取るのはその為である。もっとも「お勉強」の域であれば、性来あまり努力家でもなし、自分で読む書物や論文など、さしたる数には上らない。これが、「研究」（論文を書くこと）となると、参照すべき文献の範囲（必ずしも量ではない）はだいぶ違ってくる。大学はじめ各種機関のご厄介にならざるをえない。ところで、「研究」が愉しくなるためには、手早さ、という、もう一つ必要なものがある。

附属図書館で日々消費されるコピー料金はかなりの額に上るであろうが、その全部が他機関への複写依頼に係るものではない。けっこうな分量の複写が、附属図書館から教官の個人研究室ないし学生さんたちの下宿までの、短い距離を移動しているはずである。論文は、多数の定期刊行物のどれにも載る可能性があるし、短いわりに読むのに時間を要するものであるから、個人で複写を蓄め込むのがすでに常識である。しかし単行書や事典類も、相当量の部分的分身を育て上げているであろう。自由に切ったりはったりしたいという作業上の理由もむろんあるが、研究棟から附属図書館までの隔たりが、作業に求められる速度上の快感を阻害しているわけでもある。日々、種々の検索に赴くことすら億劫であり、「もっと早くパソコン通信に挑戦しておけばよかった。」という次第。従来は、電子複写のきかない線装本が手写の最後の牙城であったが、最近は名高い某々研究所や某々文庫を訪れても、短時間に内容を確認し撮影願を

出して辞去する場合が多くなっているのではあるまいか。地方在住者ならなおさらのことだし、当該書籍そのものを研究対象にした場合は、きわめて職住接近していないかぎり、同じ都市の居住者でもなかなか通いでは扱いきれない。まして近時若い者は楷書以外の書体が即時に読めぬが、常時くずし字解読字典を携帯しているわけではない。

さらにもう一点、緊張度というものがある。これはプラスにもマイナスにもはたらくであろうが、図書館での読書と個人研究室や自宅での読書の間には、映画館での名画鑑賞とホームビデオによる視聴とに似た違いがある。だからこそ、歌の文句ではないが、「秋の日の図書館のペンとインクの匂い」が、うるわしの君の横顔とともに、青春の胸に刻み込まれ得るのだろうが、これが日常化しては身体が続かない。もっと気のおけない間柄になっておいたほうが楽であるし、ありのままの面や、意外な一面を発見する条件にもなる。もっとも、狎れて気を許しすぎたり、ほったらかしにしてしまう危険性も高まる。

新技術のことにはおよそ疎いけれども、もしも将来、諸機関の蔵書のページが瞬時に手もとの画面に映し出されたり、それを直接ばらしてデータベースに入れられるとか、すぐに必要部分の複製が（紙の上にとは限らない）とれたりするようになるのであれば、心身にもたらされる別種の難題はともかくとして、上のような問題はおおむね解決されるわけである。しかし、それで文献の調査が活性化するとしても、現在までに集積されているような形態の書物に関する限り、書物自体の利用度が増すことにはならない。その書物の記載内容およびその書物自体に関する情報が、軛から解き放たれて大量に増殖や飛翔を繰り返すだけであって、書物はだんだんと世間を狭くしてゆき、老練な図書館員のかたがたのみがその幸福な守護者となられるであろう。「博物館物」という言葉があるが、いわば「図書館物」の本には今の目でみて非社交的な人種が多い。内気、昔気質、権高などの凹凸ある肌触りを多分に備えている。学術雑誌にしても、空気のような、単なる知識の伝達回路であるわけではない。それにひきかえ、その分身たちには、（私でも知っているマイクロリーダーの画面やコピーの紙面を思い浮かべてのお話であるが）、当世風の如才のなさがある。彼らの乗り物である機器類のコマーシャルなフォームの影響があるのか、ときには原物の持つ「凹凸」さえ、むしろ親密な個性として控え目に売り込んでくる。それは昨今、強い自我や屈折を含んだ気配りなどまでが一様に「かわいい」と評されて違和感がないのと、いくらか軌を一にして、しかもそれのような野趣を感じさせない。もっとも、某書店のうちあがった影印本などを見ていると、原物の頑なさがむしろ原物以上の抵抗をもって迫ってくるように思われるときがあるから、複製技術の程度や方針によっては、時代の気韻のようなものすら、ことによっては増幅して、伝達できるようになるものかもしれないが、世に「採算」というものがあって、当該分野の要求水準に従うであろう。現在なお家庭用の電話で新作を発表したがる音楽家はいまい。

現在すでに、一般性の高い辞書などは、検索を第一義とした新しい形態で出版されているのであるから、書物の形式もこれから漸次多様化してゆくのであろう。もっとも辞書類にはもともとデータベースとしての機能も濃く、従来検索や相互参照の便に工夫がこらされてきたのである。また、個人の死やグループの解散とともに埋もれることの多いカード形式の知識の保存・出版もよろしかろう。一方、内容に起承転結のある一般的な出版物の為には、索引さえ完備されれば、現在あるような紙の綴じ本という形式も人間にとってなかなか効率的なものであるし、それに、希少になりゆくものは、その美の血統を絶やすまいとする志を誘う。だが、後者はやりすぎないのがよい。誰しも、自分をとりまく時代にこそ郷愁を感じるものであるし、たとえば私にしても、造詣豊かな古書店主のかたのご好意で、昭和初年頃（?）の文芸書などを目の下にさしつけられ、「ねっ、こういうのを見ると、何か感じませんか？」などと言われたとして、ただちに知己の感を深くすることができようとは、とても信じられないのである。たとえそのものの魅力には心を打たれていたとしても。

（人文学部助教授）

# 平成4年度大学図書館職員長期研修に参加して

吉　光　紀　行

この度、幸運にも文部省及び図書館情報大学主催の平成４年度大学図書館職員長期研修に、参加する機会を得ることができた。平成４年７月13日から31日までの約３週間である。この研修は、大学図書館の運営の改善とサービス向上を図るため、毎年度実施されている。特に、今回の目的は、「大学における教育・研究の急速な進展に伴い、学術情報の迅速かつ的確な提供が重要になっており、大学の中核的な情報資料センターとしての大学図書館が果たす役割はますます増大している。このため、係長を中心とする中堅職員に対し、学術情報に関する最新の知識を教授し、職員の資質と能力の向上を図ることにより、大学図書館の情報提供サービス体制を充実する。」となっており、利用者サービスを前面に押し出したかたちになっていると思われる。

この研修の参加者は、北は北海道から南は鹿児島までの、全国の国公私立大学及び研究機関から総勢42名の図書館員である。また、ほとんどの参加者は、研修期間中の宿泊は、１週目と３週目は、筑波地区で図書館情報大学学生宿舎を利用し、２週目は、東京地区で国家公務員共済宿舎「竹橋会館」であった。

前置きはこれくらいにして、簡単ではあるが、受講した内容やこの研修中に感じたことを報告したいと思う。

第１週目、いよいよ研修の始まりである。この週は、図書館情報大学で研修が行われた。開講式のあと、講義が始まった。

「大学図書館の在り方」、「大学図書館行政」等、大学図書館の運営に関する総論から始まり、いまはやりの「学内ＬＡＮと図書館」、「国際標準化機構（ＩＳＯ／ＴＣ49）の動向」など個々の詳細に渡り、講義が進んでいった。その幾つかの講義のなかで、特に印象的な発言があった。それは、図書館情報大学・石井啓豊助教授の「新しい大学図書館サービスの在り方」という講義のなかで、「学者は基本的に図書館へ行きたくない。研究室に居ながらにして、サービスを受けたい。」と。このことは、図書館の現状を考えれば、大変厳しい言葉であるが、まさに図書館は利用者サービスなしでは語ることができない一言であった。

１週目が終わる頃になると、受講生の名前と顔が一致するようになり、各大学の実状やこれからの動向について、毎夜アルコールを口にしながら時間外討論会が開かれ、熱い論議が飛び交った。講義も大切であるが、それ以上に、この生の声がこれからの図書館の運営の鍵となる重要なエッセンスが含まれているように感じた。

２週目に入り、場所を東京に移して、学術情報センターを皮切りに、東京工業大学、国文学研究資料館、慶應義塾大学、国立国会図書館、東京大学、早稲田大学と毎日目まぐるしく移動した。

それぞれの図書館では、特色ある運営方法や考え方及びこれからの事業方針等の講義を受け、また各施設の見学をさせていただいた。また、学術情報センターでは、ＮＡＣＳＩＳ－ＩＲの実習を受けることができ、大変有意義な１週間であった。

特に、この週は連日33～36℃という猛暑が続き、体力的に大変厳しいものであった。しかし、それにもめげず時間外には、何人かのグループは、課外活動ならぬ東京見学へと出かけていった。大したパワーだと思う。

そうこうしているうちに最後の１週間となり、また筑波に戻っての講義となった。この頃になると、研修の終わりが待ちどおしいことと、皆との別れとが入り乱れて、嬉しいような淋しいような感じを受けた。

この週は、講義及び実習とともに、受講生による共同討議が行われた。この共同討議は、受講生から出された幾つかの課題を、１.資料保存、２.土曜日開館、３.相互協力、４.大学図書館システムの４つのグループに分け、共同で討議をしてその結果を最終日に報告するものである。実際には、時間切れで結論めいたものは出なかったが、現在の図書館が抱えている諸問題を、

実務担当者レベルで中身の濃い討議が行われた。その中ではやはり、1.資料保存では、廃棄基準の問題や資料収集の組織化、2.土曜日開館では、パート職員による運用問題、3.相互協力では、料金決済方式の統一やＩＬＬシステム、4.大学図書館システムでは、システムのパッケージ化に絡む問題、が主な話題になった。

そうして最終日となり、総勢42名が一人も欠けることなく閉講式を迎えることになった。

振り返ってみると、大学図書館は、近年の傾向のとおり、情報化社会、情報化時代に切っても切れない関係にあることを再認識させられた3週間であった。学内ＬＡＮを始めとする、情報ネットワーク等、電算化が益々進む今日、図書館員として、利用者に対し、どのようなアクセスをしたら利用者のニーズを満足させられることができるのか、真剣に考えなければならないのではないか。そういう思いがいっぱいである。

最後に、この研修において、受講生同志のヒューマンネットワークを構築できたことが何よりも最大の収穫であったことを報告する。

（医学部分館閲覧係長）

## 寄贈図書

（本　　館）

三　木　俊　克（学内共同教育研究施設助教授）

ＥＳＲ顕微鏡：電子スピン共鳴応用計測の新たな展開　池谷元伺　三木俊克著
シュプリンガー・フェアラーク東京　1992

信　森　廣　光（人文学部教授）

マルタ語　基礎　1500語　信森廣光編　　大学書林　1992

柴　田　勝　二（人文学部助教授）

大江健三郎論：地上と彼岸　柴田勝二著　　有精堂出版　1992

牧　田　登　之（農学部教授）

日本猿の解剖図譜　牧田登之著　　東京大学出版会　1992

西　口　　毅（教養部教授）

化学Ⅰ、Ⅱ（月、火）、Ⅲへのメモ：1992年度版　西口毅著　　1992

松　本　徳　夫（元理学部教授）

火山の一生　松本徳夫著　　青木書店　1987（地球の歴史をさぐる；2）

阿蘇火山：世界一のカルデラ　松本徳夫　松本幡郎編　　東海大学出版会　1982
（東海科学選書）

遙かなる揚子江源流　松本徳夫　松原正毅編著　　日本放送出版会　1987

日本の山　大久保雅弘　堀口万吉　松本徳夫編著　　平凡社　1988（日本の自然；4）

山・探検・フィールドワーク　松本徳夫著　　玉川大学出版部　1978（玉川選書）

## 日　誌

6月24日(水)　第39回国立大学図書館協議会総会（帯広東急イン）
7月1日(水)　第62回附属図書館運営委員会、第34回本館図書委員会
7月2日(木)　工学部図書・研究報告委員会
7月3日(金)　県内高校長図書館視察（7名）
7月9日(木)　山口大学公開説明会（高校教諭）
7月21日(火)　山口大学公開説明会（高校生）本館、医学部分館、工学部分館
8月3日(月)～7日(金)　蔵書点検のため休館
8月6日(木)　医学部分館図書委員会
〃　福武書店ガイドによる近郊高校生見学
8月14日(金)　山口県立衛生看護学院生見学（5名、工学部分館）
9月7日(月)　熊本県三加和町老人大学見学（約120名）
9月11日(金)　工学部持ち回り図書・研究報告委員会
9月17日(木)　医学部分館図書委員会
9月25日(金)　防府高等学校ＰＴＡ見学（68名）

編集・発行　山口大学附属図書館　〒753 山口市大字吉田　☎(0839)22―6111　内線788